

# 小川芋銭年表

北島 健 編著

©本年表の無断転載を禁じます。

和暦	西暦	月	年齢	事項
慶応 4年 明治元年	1868	2月		18日、江戸赤坂溜池の牛久藩邸内に、父・同藩大目付小川伝右衛門賢勝（よしかつ）、母・多いの長男として生まれる。幼名を不動太郎、後、茂吉（しげきち）と改める。
明治 4年	1871		3	廃藩置県に際し、父・賢勝は、農業にて生計を立てることを決意。一家は、旧藩地新治県河内郡城中村（現牛久市城中町）に居を定める。同年秋、伯父に従って城中村に移る。
明治 8年	1875		7	*通説 この頃、守谷町（現守谷市）住の鈴木快應方に預けられる。
明治 9年	1876		8	*通説 牛久村下町の牛久学舎（後の牛久小学校）に入学。 黒須加一郎筆『生徒人名書』によれば、この年7月8日以前には、在籍せず。したがって、入学はこの日以降。
明治11年	1878	2月 3月	10	1日、弟「安三」生まれる。 牛久小学校下等小学第六級を卒業。
明治12年	1879	10月	11	2日、牛久小学校下等小学第三級（前期）を卒業。卒業証書裏に「優等」とある。ほどなく上京。親戚筋に身を寄せる。
明治13年	1880	10月	12	25日、東京府芝区公立桜田小学の小学尋常科第三級後期を卒業。
明治14年	1881	8月	13	この年、画学専門校「彰技堂」に入る。 この月、牛込神楽坂大江写真館にて、同堂の牛込同窓記念写真撮影。これは、現在知られる芋銭の写真中最も古いもの。
明治15年	1882	5月	14	中旬、東京芝日蔭町の書籍店で、『国史略 卷之一、卷之四』を求めらる。
明治16年	1883	9月	15	この月、神保町の書籍店で、『幼学詩韻 第1巻』を求めらる。
明治18年	1885	5月	17	31日、画学専門校「彰技堂」の全科終了。「彰技堂」を出て後の数年間、芋銭の消息は不明。 *通説 親戚筋の「藤屋小間物店」他を転々としてつづつ画事に熱中した、という。
明治21年	1888	9月	20	*通説 この年、尾崎行雄の推挙で、朝野新聞社の客員となる。7月15日、会津磐梯山大噴火。朝野新聞社はこの大事に洋画家・浅井忠らの特派、この一員として芋銭も随行し惨状を写す。以上の事実は、朝野新聞紙上に確認できず。 25日、「彰技堂」で共に学んだ広瀬孝次と共に、上野三橋東側の大江力太郎写真館で記念写真撮影。
明治23年	1890	4月 5月 10月 11月	22	*通説 明治23年頃、号「芋銭」を使用。ただし、これを裏付ける資料はない。 4日、尾崎行雄（同日付）からの書簡を受け取る。これが機縁で、14日の『朝野新聞』に、同紙上における初の芋銭の挿絵（手拭いの冠り方を題材とする）が掲載される。 5日、午後4～5時頃に、銀座四丁目の朝野新聞社屋にて尾崎行雄に面会。尾崎から、「第三回内国勲業博覧会」の景を写すよう依頼される。17日から翌5月23日までの同紙上に、断続的にそれらが掲載される。 23日、『朝野新聞』に、短文「共同休憩所の図説明」を書く。 25日、父賢勝の隠居に伴い家督を相続するも、牛久には戻らず。 25日、第1回帝国議会招集。朝野新聞の画工として、議会スケッチを試みる。この時、富山選出の議員島田孝之（俳画堂の縁戚）を瞥見したる縁などにより、『血涙余滴』（昭和5年）の序文を書くことになる。
明治26年	1893	8月 10月	25	東京市赤坂区台町47番地の「法安寺」などにも寄寓。 下旬、脚氣に悩まされる。 22日、午前6時、断ち難い画家への思いを抱きつつ東京を離れる。以後、牛久での日々が始まる。
明治28年	1895	2月	27	21日、牛久村の黒須巳之助の二女「きい（こう）」と結婚。
明治29年	1896	3月	28	29日、長女「はな」生まれる。
明治35年	1902	3月 7月 9月	34	7日、長男「修一」生まれる。 4日頃、内藤鳴雪を訪い快談する、また、病床にあった正岡子規を訪うも、病状思わしくないため、数分にて辞去。その後帰郷。 22日、福田井村から、正岡子規の死去を知らされる。子規の追悼会を計画する。
明治36年	1903	1月 8月 10月	34 35	『読売新聞』の懸賞絵画に「新年の意」が第一等当選、元旦の同紙面を飾る。 1日、午後5時30分、水戸ホテルにおいて開催の「第四回いはらき晩餐会」に招待され参席。 5日、『いはらき』新聞に、挿絵「晩餐会における諸賢の容貌について」に添えて短文を書く。 この年、田岡嶺雲、佐藤秋蘂らの紹介で小杉未醒を知る。 4日、『読売新聞』に、挿絵「常陸国安寺持方の山村」とその図解を書く。
明治37年	1904	1月 2月 3月 5月 6月 7月 10月 11月 12月	35 36	10日、『いはらき』新聞に、短文「若葉絵画展覧会を観る」を書く。文芸団体「木星会」が水戸に発足。その名称「木星」は、芋銭の発案による。 24日、『週刊平民新聞』第11号に、挿絵を描く（廃刊まで続く）。また同号に、幸徳秋水宛の書簡が掲載される。 16日、杉田雨人へ、絹及び唐紙へ描いた作品を送る。 6日、『週刊平民新聞』第17号に、短文「女化原に於ける移住民村」を書く。 1日、『週刊平民新聞』第25号に、書簡が掲載される。 4日、水戸から牛久に戻る。牛久駅から自宅まで、車（人力車）に乗る。 5日、杉田雨人に水彩による風景画を2点送る。 29日、同新聞第29号に、掲載する挿絵とその説明文「本号挿絵について」を書く。 5日、『いはらき』新聞に、挿絵「ヴェレストシヤギント其作品」に添えて短文を書く。 2日、父「賢勝」死去。 2日、同日付『いはらき』新聞に、芋銭の絵画と人物を評した、佐藤秋蘂の「芋銭君の画」と題する一文が掲載される。 3日、『週刊平民新聞』第34号に、「枯川先生今日獄を出づると聞き」と題し短歌3首と、『秋水先生の病を訪ふ』と題し短歌1首を発表。 24日、『いはらき』新聞に、裏中旬として俳句6句を発表。 28日、黄昏時、平民社に幸徳秋水を訪う。 30日、『週刊平民新聞』第51号に、俳句2句を発表。 6日、『いはらき』新聞に、挿絵とその賛「負傷兵慰勞の辞に・・・」を書く。 20日、同誌上に、短文「悼清流子」と俳句1句を書く。 11日、『週刊平民新聞』第57号中の挿絵「王陽明々々歌戯画」について、幸徳秋水宛てにその説明を書き送った短文「挿絵に就て」が、挿絵に添えて掲載される。
明治38年	1905	1月 2月	36	1日、『週刊平民新聞』第60号に、俳句2句を発表。 8日、同新聞第61号に、「春の句」と題して俳句5句を発表。 15日、同新聞第62号に、挿絵「新光」とその解説文「新光図解」及び、挿絵「宝舟痴人の夢」とその解説文「宝舟痴人の夢」を書く。 17日、水戸に杉田雨人らと会し、泊。 31日、杉田雨人に、唐紙に描いた作品及び絵葉書をそれぞれ1点贈る。 『直言』（5日の第2巻第1号～）及びその後雑誌『光』（12月5日の第1巻第2号～）に、挿絵等を描く。 17日、『いはらき』新聞に、「素居吟」として俳句11句を発表。

		37		母「ゑい」の病のため上京。赤坂丹後町などに滞在。 23日、『天鼓』第1号に、挿絵を描く。
			3月	前月より、引き続き在京。 15日、二男「洗二」生まれる。
			4月	25日、荒畑寒村、牛久に来訪。
			5月	16日、『いはらき』新聞に、俳句1句発表。
			9月	10日、『いはらき』新聞に、芋銭の書簡が紹介される。同日、『火鞭』第1巻1号に初めて表紙絵を描く。
			10月	29日、『いはらき』新聞に、「てがみ(四) 小川芋銭氏」として書簡が掲載される。
			11月	3日、『急先鋒』第1号に、短文「もでるの徳ちゃん」を寄稿。 20日、『光』第1号に、「貧農を憐れむ」と題し俳句3句を発表。
		12月	25日、『いはらき』新聞に、「焼見舞」として俳句8句を発表。	
明治39年	1906	38	4月	15日、母「ゑい」死去。27日、亡母27日忌を行う。
			5月	5日、『光』第20号に、短文「土龍と若き農夫」を書く。
			9月	18日、『いはらき』新聞に、「青鬼灯(五)」として、俳句1句ほかを発表。
			10月	25日、『光』第25号に、「ストライキ案山子物語」を書く。
明治40年	1907	39	1月	15日、『日刊平民新聞』に挿絵を描く(廃刊まで)。
			5月	5日夜、鹿島櫻巷、牛久に来訪。 8日、白柳秀湖著『離愁』の挿画成り、送る。 12日午後4時、鹿島櫻巷、牛久に来訪し、根古屋の水亭で共に小酌。 23日、8日送付した著書のための他の画稿成る。
			8月	13日、翌月1日発行『新声』第17編第3号の表紙図案を描き終わる。
			11月	22日、(この頃) 東亜新報社に入社。一時、居所を「東京赤坂丹波町74 会美方」に定める。
明治41年	1908	40	1月	1日付『いはらき』新聞に、短文「岩戸神楽のむかしより」が掲載。
			3月	4日付『いはらき』新聞に、挿絵「東京絵通信 其三(法廷スケッチ)」に添えて短文を掲載。 20日、『火柱』第1巻第1号に表紙絵を描く。 月末、田岡嶺雲に、神田駿河台にある高田病院に入院中の、佐藤秋嶺の危篤を知らせる。
			4月	3日、佐藤秋嶺葬儀のため水戸へ出る。
			5月	1日、田丸屋隠居の素描完成。
			6月	16日、最初の著書『草汁漫画』(日高有倫堂)を刊行。
			8月	『国民新聞』(明治41年8月12日～明治45年7月7日)及び『東京毎日新聞』(明治41年8月20日～明治45年1月6日)に多量の挿絵を描く。
			9月	5日、田岡嶺雲との共著『有声無声』(崇山房)を刊行。
明治42年	1909	41	1月	13日、三男「知可良」生まれる。
			3月	6日、『いはらき』新聞に、挿絵「芝公園瀧」に添えて短文を発表。 18日、取手の長禅寺御開帳記念スタンプを制作。
			5月	12日(この頃)、取手の宮文助を知る。
			6月	月初め、体調優れず、2週間ほど漫然と日を過ごす。
			7月	月初め頃、宮崎仁十郎の子息を見舞うため、雨中、牛久から筑波山麓の病院まで、徒歩で出かける。
			11月	13日、親族の病のため、急遽、東京から牛久に帰る。
明治43年	1910	42	1月	5日、東京毎日新聞紙上に描いた「人日」で、初めて「芋銭子」のサインを用いる。
			3月	13日、『利根川図志』を読む。
			4月	■日発行の『ホトトギス』第13巻第8号に、初めて挿絵を描き、以後没年の昭和13年まで同誌に関わる。 11日、宮崎仁十郎の計らいで、芋銭の絵の希望者2～3名ほど出来る。数日前、板橋不動尊の縁日に出かける。
			5月	齋藤隆三の紹介で、読売新聞日曜付録に漫画を描く。 5日、漫画5点を齋藤宛送る。 この月、大逆事件が始まり、幸徳秋水等が検挙される。芋銭にも嫌疑が向けられ、刑事の尾行がつくようになる。
			8月	7日、水戸の商家にて、小杉未醒(放庵)と会し酒を酌み交わす。 8日、福島の白川に入る。後、会津若松に入り、長尾柳涯宅に滞在。 15日、本郷瀬戸町の関山窯にて陶画を試みる。 20日、夕刻、会津方面旅行から牛久に帰る。牛久沼周辺は、水害に見舞われる。
			10月	15日、自宅にて造った茶を長尾柳涯へ送る。
			11月	下旬、東京の齋藤隆三(宮崎仁十郎の同窓)を訪い、齋藤宅に泊。 25日、長尾柳涯より送られた樽柿を受け取る。
明治44年	1911	43	3月	29日、小高村(福島県)の大曲駒村(省三)宛て、渡し場及び野人生活の景を描いた作品を送る。
			4月	15日(この頃)、三田翁(政治家・根本正)肖像画を描く。
			5月	17日、長尾柳涯から依頼の屏風を描き始める。 31日、中里介山、牛久に来訪。この時の訪問記が、翌月の『都新聞』紙上に、5回にわたって連載(2～4、6～7日)される。
			6月	30日付『東京毎日新聞』に、「牛久沼」と題する鹿島櫻巷の、牛久訪問記が掲載される。
			9月	13日、小高村の俳人・大曲駒村と松川浦を遊覧。同日、相馬町泊。 14日、福島に入り、藤金旅館に泊。 15日、青山学院の学生の案内で、飯坂湯野の温泉に遊ぶ。 18日、午後3時、福島を立ち会津若松に入る。午後9時、旅館に入る。 19日、長尾柳涯を訪う。
				25日、柳涯の案内で、会津若松城趾を見学。 30日、東山の旅館「新瀧」に横山大観を訪う。
				8日、長尾柳涯と共に山都村の田代蘇陽(与三久)を訪う。蘇陽の案内で、小鳥山及び築場を見学。 9日、蘇陽と共に、舟引村に遊ぶ。 10日、喜多方より熱塩温泉に遊ぶ。同地の示現寺を見学。
				芋銭未醒漫画展覧会を、東京(12日～18日)及び大阪(22日～28日)の三越呉服店で開催、「棕櫚の花」「月の人」「寒念仏」など50点を出品。出品画はあまり売れず。 17日、東京より牛久に帰る。 18日、痔疾のため静養。 19日、再上京。
			10月	
			11月	

				21日頃、大阪に入る。			
		12月		初旬、奈良に入り、法隆寺などを見学。 12日夕刻、高浜虚子、牛久に来訪。			
明治45年 大正元年	1912	3月	44	14日、大曲駒村から依頼の屏風について、12ヶ月の景物を描く予定と通知。併せて、潤筆料を屏風一双で四十六円に定めると通知。 21日、依頼の絵が50点以上あり、そのうちの40点ほどを来月初旬までに制作しなければならないと、大曲駒村宛の書簡に記す。			
		5月		15日発行の田岡嶺雲著『数奇伝』に、挿絵を描く。			
		6月		9日、東京の親戚(妹の嫁ぎ先)に不慮の事件勃発のため上京、これに奔走する。 18日夕、一時牛久に帰る。後、再び上京。 29日夕、牛久に帰る。			
		9月		10日、田岡嶺雲葬儀のため上京。			
		10月		24日より数日前、小杉未醒を訪う。序でに、上野竹之台陳列館に第6回文部省美術展覧会、銀座の読売新聞社に第1回ヒュウザン会展を観る。 大観の文展出品作「蕭相八景」について、「さりとして大観を深達なる内面的描写家の如く誉めたる候は野生は呑込めかね候 野生は内面的には浅き軽き意味なるを見居候」と、24日付けの長尾柳涯の書簡に記す。			
		11月		7日、田岡嶺雲追悼文集『嶺雲文集』のため、「混沌死」(南海と北海の智者の為に七竅を穿たれ死したる混沌の状)を描き、齋藤隆三宛送る。同日、水戸へ出て福田井村と会す。水戸に泊。後、会津に向かう。			
大正 2年	1913	1月	44	1日、喜多方の笹屋旅館で新年を迎える。 24日、宇都宮に1泊、翌25日、水戸線を経由して、午後3時、会津方面旅行より牛久に帰る。 今まで使用の雅印(印文不明記)を破棄し、新年より新たな雅印四顆(銅印及びキルク印、印文不明記)を使用する。			
		6月		45	25日発行の、『嶺雲文集』の扉絵を描く。		
		10月			16日、武石如羊の依頼で、如羊の弟浩波が飛行機事故で遭難した折り世話になった大阪の某氏へ贈る記念画を描き始める。		
大正 3年	1914	2月	45	田代蘇陽らが中心となり、「草汁画帖頒布会」が企画される。 7日、その規定案を作成し、田代宛送る。 23日、熊沢蕃山の書簡を見る。 28日、蘇陽依頼の油絵「鷺娘」(題材を長唄より取り、画意は沼の象徴)成る。			
		3月		7日、油絵「鷺娘」を、田代蘇陽に送る。 この月、片野脱牛追悼会のため、水戸へ出る。			
		5月		2日、田代蘇陽より送られた酒「龍門」を賞味する。			
		6月		先月来より痔疾にて貧血その他に悩まされ、暫く擱筆するも、中旬頃癒える。			
		7月		この頃、芋銭が俳画雑誌を発行すると誤った噂が流れる。			
		8月		46	13日、小川千甕より南方の色彩に満ちた「コロンボの更紗」が送られる。 31日、水郷屏風取材のため、牛久沼岸を周遊。夕刻、小貝川氾濫の久賀村を巡見。		
		10月			7日、二女「桑子」生まれる。 初旬、千葉県佐原の親戚へ行く。 17日、日辻安五郎来訪。		
		11月		10日、宮崎仁十郎と快談、大酔し履き物を間違う。			
		12月		上旬頃、長尾柳涯より会津木綿が送られる。 31日、日辻安五郎来訪			
		大正 4年		1915	1月	46	9日、湯治のため関西方面(神戸)への途次、神田一橋通の俳画堂を訪い、微恙のため同堂に13日まで滞在。これが俳画堂との機縁となる。 14日、神戸に入る。日辻安五郎も同道する。この旅では、大阪に2日間ほど滞在し、春沙庵にて、青々・鼓竹・月斗・蜷楼そして春沙らの諸氏に会す。
3月	初旬頃、牛久に戻る。義母が危篤に陥るも小康を得る。						
4月	池田永治、小川芋銭、小川千甕、川端龍子、鶴田吾郎、名取春仙、山村耕花、平福百穂の8名にて絵画団体「珊瑚会」(大正13年の第10回展まで開催)が結成され、21~30日、その第一回展(松坂屋いとう呉服店)に、「尾花の踊」などを出品。						
5月	1日、会津若松の東山に入る。						
6月	47		平泉の金色堂などを見学。 19日、万字峠を越えて実川村の五十嵐家に、3~4日間逗留。 24日、喜多方にて田代蘇陽と分かれた後、会津若松の長尾柳涯宅に入る。長尾宅にて、半折・小額などを制作。 27日、平野捨吉と本郷瀬戸町に行き、同地にて陶画5、6点を描く。				
7月			5日、朝、宿の飯坂「赤川屋」から近くの天王寺温泉あたりまで出かける。 上旬、女化(牛久)の青木氏、寄寓先の「赤川屋」へ来訪。				
8月	24日、日暮れから夜にかけて、牛久沼辺を逍遙する。 この月、山村暮鳥、牛久に来訪。						
9月	20日付『いはらき』新聞に、山村暮鳥の「二十五星の一 小川芋銭(下) 芋銭子訪問記 日本のゴッホ」が掲載される。						
11月	中旬、第9回文部省美術展覧会を見学の後、田端に小杉未醒を訪い、小杉宅に1泊。翌日牛久に帰る。						
大正 5年	1916		4月		48		6日、俳画堂主(島田勇吉)及び石倉翠葉と日光方面へ旅行。その途次、古河の鮭延寺に熊沢蕃山の墓を見学。同日夜、日光に入り「古橋旅館」に泊。 7日、日光を巡る。東京を経て牛久に帰る。
			5月				5日、小川千甕の会津旅行に際し、千甕のために田代蘇陽への紹介状を書く。
		9月	平福百穂の褒詞により、西山泊雲より、短冊俳画を依頼される。短冊15枚送られ、内3枚書き損じる。完成の12枚を、1日、泊雲宛送る。 これが、西山泊雲との親交の機縁となる。				
		10月	18日、宮崎仁十郎令孫誕生に際し、祝意画を贈る。また、宮崎所望の「紅葉村」も併送する。				
		11月	中旬、益子方面へ旅行。 15日、宮文助らと西明寺へ詣で、製陶場などをスケッチ。 16日、益子の諸所を巡る。 17日頃、牛久に帰る。				
大正 6年	1917	1月	48	2日、「弁財天」を描き、田代蘇陽宛て送る。			
		2月		1月より体調を崩し、当月初めには1~2回吐血し、床に着く。郷里や近郊の医師の診察を受けたが埒があかず、11日、受診のため上京。 12日、大学病院にてX線などの診察を受ける。引き続き東京に在って、診察を受ける。 14日、東京に在り。			
		4月		49	10日、上京、4~5日滞留。折から表慶館で開催中の南宗画展鑑賞に2日間を費やす。 29日、最近入手の『(渡辺)華山全集』を読む。この頃、大阪毎日新聞記者周旋の下、金沢と名古屋に催す画会に向け準備を始める。		
		5月			15~25日、第三回珊瑚会展(白木屋呉服店)に、「肉案」他を出品。これが日本美術院同人に推挙される機縁となる。		
		18日、長塚忠策あて「酒吃蕉遂雄弁驚四筵図」を送る。					

		6月		この月、推されて日本美術院同人となる。		
		7月		4日、東京を夜行にて発ち、5日午前9時、名古屋に入る。 8日、名古屋市熱田増福寺に在り。		
		8月		5日、名古屋市熱田に在り。 6日、一旦名古屋を離れ、京都府瓶原村の木津川沿岸に遊び、数日滞在。瓶原を出て奈良に入り博物館を見学、それより宇治に出て、宇治川沿岸の黄檗寺に遊ぶ。 11日、京都より再び名古屋に入る。 12日までに画会の一切を済ませ、同日、夜行列車に乗る。 13日夕、牛久に帰る。その後、院展出品画の題材を得るため、1週間ほど舟などにて霞ヶ浦を巡る。後、土浦の神龍寺の一室を借り、院展出品画の制作に励む。 29日、五景のうち二景完成。残り三景は、牛久にて描く。		
			9月		2日、日本美術院晩餐会出席のため上京。11～30日開催、再興第4回日本美術院展（上野、竹之台陳列館）に、霞ヶ浦を題材とした「沢国五景」を初出品。 9日、出品画総てを描き終わる。芋銭作品は、初日に間に合わず、13日から陳列。 20日頃、菘粕肥料を運び入れる時、腰骨を痛め、暫く起居に不自由する。	
			10月		3日、暴風雨の為眠りを妨げられ、午前1時より夜の白むまで瞑想を続ける。	
		12月		18日、上京し数日間滞在。 24日、会津に入る。 25日、山都の田代宅に入る。 27日、俳誌『杉葉』会津坂下同人を訪問、記念写真撮影をする。		
大正 7年	1918	1月	49	1日、山都の田代宅で越年。 この月、喜多方美術倶楽部誕生、芋銭はその顧問となる。 7日、喜多方美術倶楽部の歓迎会に参席。		
		5月		30日、珊瑚会展観覧などのため上京。翌月1日、牛久に帰る。		
		7月	50	宮文助、福田井村らと益子に遊ぶ。16日、取手に小酌し、午後7時帰宅。		
		8月		初旬、俳画堂主と、越中方面を旅行。黒部峡谷、井波の黒髪庵、浪花上人遺蹟などを見学。砺波の徳万宝念寺に50日間ほど滞在。 31日、院展出品画3点のうち、2点を滞留先から送る。		
9月		13日、徳万宝念寺に滞留。				
大正 8年	1919	1月	50	1日、牛久にて新年を迎える。1日付『いはらき』新聞に、「芸術家 小川芋銭君」と題する芋銭の寸評が掲載される。 4日、長女「はな」の縁談が決まり、本月中に挙式と決まる。 10日、宮崎仁十郎と共に銚子港道遙の折、名石を拾う。後に、これを「波紋石」と命名す。		
		4月	51	30日、石倉翠葉、浅草象潟の芋問屋で俳人の島田氏を伴い、牛久に来訪。島田家復興の為俳画頒布会を企てるに当たり、芋銭に仲介の労を依頼する。これを受けて、小川千麿にこの企てに協力するよう、千麿宛ての書簡中に記す。		
		6月		12日、4月30日付書簡で協力依頼した島田家復興俳画頒布会の件で、千麿宛て再度依頼の書簡を書く。		
		9月		18日、良寛堂建立発案者の佐藤耐雪、牛久に来訪。		
		10月		中旬、近隣に洪水。牛久沼と小貝川の状を観る。牛久沼の増水を写しながら、竜ヶ崎に泊。帰途、牛久沼の様を再見する。		
		11月		23日、上京、大森駅前の「望翠楼」にて開催の師本多錦吉郎の古稀祝賀会に参席、また、記念撮影をする。午後4時散会		
3月		『日本美術界』第2巻第3号「本多錦吉郎号」に、師を回顧した「本多契山先生」を寄稿。				
4月		末日、小川千麿、筏井竹の門、牛久に来訪。				
7月		4日、「陶潜道遙園」を西山泊雲宛汽車便にて送る。二階増築普請が始まり、同日、柱立てが完了する。 7日付泊雲宛の書簡で、普請中の二階の画室を「天魚楼」と名付けたと記す。また普請中の梁上から牛久沼を眺め、別趣の感ありとも記す。 31日、寄進画「老子」を良寛寺へ寄贈。				
8月		29日、宮文助と共に午前11時50分、秋田を発ち、同日午後5時、青森に入る。青森駅前の旅館「健屋」に泊。 30日、函館まで連絡船「比羅夫丸」に乗る。船長事務長らの優待を受け、一等室中大臣室に案内される。午後2時近く、函館港に入る。同日函館の藤村宅に泊す。 31日、朝、海岸を散歩。鳥賊干す海女の様子などをスケッチ。				
大正 9年	1920	9月	52	1日、朝、函館の海岸を散歩。藤村宅に戻り扇子10本余制作。夕刻、函館公園八幡社を見学。 2日、午後、藤村氏と小沼公園に遊ぶ。大沼南岸の紅葉館に泊。 3日、午前8時50分、大沼を発ち小樽に向かう。午後5時、南小樽に入り秋田旅館に泊。 4日、小樽市街を見学、宮文助と寺田氏を訪い、小続画を制作。午後4時20分小樽発、午後5時札幌着。札幌駅前の静岡屋に泊。 5日、博物館、植物園を見学。午後1時30分、札幌を発ち旭川に向かう。夜10時、旭川の旅館「永楽館」に入り泊。 6日、旭川は30年記念祭で賑わう。近文にてアイヌの集落・学校を見学、スケッチ。 7日、午前6時、旭川を発ち濱頓別に向かい同地泊。 8日、午前7時30分、濱頓別を発ち帯広に向かう。帯広まで列車連絡不明のため、旭川に戻る。旅館「宮越屋」泊。 9日、午前4時起床、午前5時30分、旭川を発ち帯広に向かう。午後1時前、帯広着。アイヌの集落などを見学、スケッチ。午後4時30分、帯広を発ち室蘭に向かう。途中旭川に下車、「宮越屋」に再泊。 10日、午前9時40分、旭川を発ち室蘭に向かう。午後6時30分、室蘭着。旅館「山越屋」泊。室蘭本町の山本均を訪う。午後3時、室蘭を発ち苫小牧に向かう。同地に泊。 12日、午前6時、苫小牧の宿を出て佐瑠太に向かう。佐瑠太駅より4里の道を歩き、午後2時、ピラウトリに着く。旅館「宮川屋」に泊。 13日、アイヌの老翁などをスケッチ。佐瑠太まで戻り、同地にて昼食。午後5時40分、佐瑠太駅を発ち、午後9時過ぎ、苫小牧に着く。 14日、午前5時30分、苫小牧を発ち、午後8時40分、函館に着く。同地の藤村宅に泊。		
				11月		上旬、俳画堂主らと、一茶詣のため信州方面を旅行。長野、戸隠、野尻湖、柏原、赤倉、木曾、諏訪、甲府などを巡る。
				12月		26日頃、増築した二階の画室「天魚楼」に畳が敷かれたため、牛久に呼び戻される。
				1月	52	1日、新年を牛久で迎える。この頃、病人の体となり、医師から飲酒・作画・読書等を止められる。また、争議の仲介役を依頼されるなど、非芸術的な日々を送る。 28日、夜眠れず、29日、疲労を感じる。
		2月		9日、この頃、日本美術院米国展のための作品制作に専念。		
大正10年	1921	7月	53	上旬頃か、長男修一病のため東京の病院にて、2回にわたり手術、時折上京。 16日、夜9時上野を発つ。磐越西線經由で越後を目指す。 17日、午前8時、新潟の五泉着。林徹宅に入る。12時、五泉を発ち村上線水原下車。午後3時過ぎ、村杉温泉着。「延生館」離れにしばらく滞在。 18日、午前5時起床。午後、城山下須賀神社薬師堂散歩。 19～21日、制作に専念。		

				22日、午後4時、新潟の佐藤・成川2氏来訪。『新潟毎日夕刊』に、芋銭来遊の記事が掲載される。			
				24日、原石鼎に書・小品画を送る。			
				28日、村杉を発ち会津に向かう。裏磐梯から檜原へ入るが、折からの暴風雨で、湖畔の宿に数日留まる。風が収まって後、湖を渡り檜原峠を越え、会津より村杉温泉に戻る。この旅中、山都村田代家別荘「南山荘」で、酒井三良を知る。			
	8月			28日、1泊の予定で、村杉温泉から新潟に出る。ここで、良寛寺和尚に偶然会す。			
		9月		4日、佐藤耐雪、滞留先の村杉温泉に来訪し、5日間滞留。 5日、新潟の成川久蔵宛、越後に伝わる奇習を題材とした「放屁図画卷」制作の約束と同図題句を、書簡にて書き送る。 12日、新潟の五泉に入り、佐藤耐雪の出迎えを受け、同地に1泊。 13日、磯野霊山、佐藤らと白山駅より弥彦に向かい、「冥加屋」に泊。 14日、朝食前に弥彦神社に詣で、「良寛碑」「鬼婆の祠」など見学。良寛堂発起人らに迎えられ、共に出雲崎に向かう。正午、出雲崎に着く。「熊本旅館」に泊。 15日、同地にて、寄進面半折10点・全紙3点を揮毫。発起人等9名、熊本旅館に会す。同旅館に再泊。 16日、佐藤耐雪らに案内され、国上山に登る。渡部の阿部家にて良寛の遺墨を観る。同地終列車にて、牛久に帰る。			
		10月		2日、出雲崎役場にて、芋銭画会が開かれる。			
大正11年	1921	54	5月	17日、酒井三良を珊瑚会同人として迎えるため、田代蘇陽へ伝達の労を依頼。			
			6月	7日、俳画堂主・石倉翠葉らと関西方面へ向けて発つ。 8日、奈良に下車、博物館を見学。同日、午後4時3分同地を発ち、王子、法隆寺を経て高野口に到着、「東雲館」に泊。 9日、午前7時、高野登山のため高野口を発ち、弘法大師母堂菩提所・九度山等を巡り、午後2時、高野に着き清水孤松宅に旅装を解く。霊宝館などを見学。 10日、午後、明王院・赤不動尊像・金剛峯寺内陣などを見学。 11日、午前、大門・七堂伽藍を見学。午後、奥の院、摩尼・楊柳・転軸の三山を巡り、帰路、美福門院廟・金剛三昧院を参拝。 12日、午後、奥の院を再参拝。 13日、午後、遍照光院にて池大雅作の大襖絵を見学。 14日、山を下りて粉川寺を訪う。和歌山・大阪を経て京都に入る。駅前の「小林亭」に泊。 15日、午前、金閣寺・仁和寺を参拝。 16日、午前、京都博物館を見学。午後、一休庵などを見学。 17日、午前9時15分、京都を発ち浜松へ向かう。同地の富田翠邦に会し、弁天島に泊。 18日、午後2時、弁天島を発ち、午後10時、東京に着く。			
			7月	1日、小杉放庵・宮文助・俳画堂主らと、益子に遊ぶ。常磐線・水戸線を経由して、午後2時頃、益子町の目下田實宅に着く。 2日、午後、七井町の宮光五郎宅を訪い、益子町に夕刻戻る。 3日、午後、益子町の窯元を見学。 4日、午前7時10分、益子を発ち、正午頃、取手にて解散式を挙げ、牛久に帰る。			
			8月	月末、須賀川の長松院を訪い、座禅の稽古のため院主の門に入ることを願い、入門式を行う。			
			9月	『中央公論』に口絵「火山湖」を描く。以後、『中央公論』に昭和12年まで断続的に口絵を描く。			
			11月	3日、陰暦9月の十五夜に、一人月を愛でる。			
			大正12年	1923	55	2月	12日、芋銭十種展出品作品のうちの1点を、三越美術部へ送る。
						3月	12日、芋銭十種展のための作品2点ほどを描きあげる。10点の作品を描くことは骨が折れると、西山泊雲宛ての書簡に記す。この月ごろ、銚子海鹿島の篠目家別荘（後、潮光庵と命名）に入る。
						5月	茨城美術展のため水戸に出て、20日、牛久に帰る。 23日、同展用務のため、再度水戸に出、数日間滞在。展覧会初日、いはらき新聞社貴賓室にて、関係諸氏と写真撮影。 25日、山村暮鳥と再会。 30日付『いはらき』新聞に、山村暮鳥の「牛久沼の画聖におくる」が掲載される。
						6月	脳に異常を感じ、大町桂月紹介の女医の診察を受けるため、6日、上京。脳溢血の危険ありとして、溢血予防治療を受け、牛久に帰る。 10日、上京、齋藤隆三を訪う。横山大観、芋銭に贈るべく、自身が所有する名墨を二分し、齋藤隆三へ預ける。これを齋藤から受け取り懐に入れるも、一時所在不明となり落胆する。しかし、背中に回っていた名墨を見つけ、大いに喜ぶ。
						7月	月初め、雑誌『相馬霊報』の木版下絵を描き、木版師へ送る。 8日、東京の医師が診察のため牛久へ来訪。脳の状態は良くなるも、中旬、また体調不良となり、29日、マラリヤ熱で呻吟する。
8月	8日、先月下旬からの熱も漸く収まる。横山大観から贈られた名墨「程君房」を、卓上に眺める。 12日、病のため院展出品叶わぬかも知れないと、酒井三良宛の書簡中に記す。						
9月	1日、自宅の2階「天魚楼」に臥せていたところに、関東大震災起こる。書棚転倒、ガラス飛散など激しく揺さぶられ、階下に降りる事も出来ず。しかし、事なきを得る。 28日、小杉放庵、俳画堂主が牛久に来訪、兩名1泊。						
10月	7日、二男洗二、石倉翠葉と共に俳画堂を見舞う。8～14日まで滞留。 14日、滝野川町田端の小島宅に転寓。 16日、転寓先に俳画堂来訪。 17日、弓削氏と共に俳画堂を訪う。 24日、転寓先に俳画堂来訪。 26日、石倉翠葉と共に俳画堂を訪う。						
12月	6日、俳画堂を訪い、同堂に泊。 7日、正午頃、二男洗二宅へ行き、泊。 8日、洗二宅へ俳画堂主来訪。俳画堂に再泊。 9日、朝、上野を発ち牛久へ帰る。 16日、磯野霊山、牛久に来訪。						
大正13年	1924	56				1月	4日、俳画堂を訪う。 25日、甥の婚儀参列のため牛久へ帰り、後、銚子へ戻る。
			2月	7日、大きめの羽箒、三寸刷毛、四寸刷毛をそれぞれ1本、絹大色紙5枚を、俳画堂へ依頼。 21日、日本美術院試作展出品画「石炭と椿の円光」を、齋藤隆三宛送る。また、同作品の価格を、200円と定める。 24日、俳画堂主、寓居先「潮光庵」に来訪。			
			3月	8日、俳画堂夫人、寓居先「潮光庵」に来訪。			
			4月	21日、上京、俳画堂を訪い、同堂に泊。 22～23日、二男洗二宅に滞留。 24日、銚子へ戻る。			
			7月	4日、山村暮鳥著『雲』（イデア書院、大正14年）の装丁画及び挿絵など成り、暮鳥宛送る。 30日、銚子を引き上げ、牛久に帰る。			
			8月	先月末より、神経衰弱に悩まされ、本月28日頃まで、制作滞る。			

		9月		28日、院展出品画2点のうち「夕風」のみを、鉄道便にて日本美術院宛送る。
		10月		『中央美術』第10巻第9号に、「長夜灯言」を発表。
		11月		23日、宮文助来訪。この月、野火止の平林寺を、宮崎仁十郎と共に訪う。 初旬、俳画堂を訪い、同堂に泊。翌日、俳画堂主と森田恒友を訪うが、不在のため、和田堀釜寺の大村挂蔵を訪う。深夜、俳画堂に戻り泊。翌日、牛久に帰る。
大正14年	1925	1月	56	2日、俳画堂を訪い、同堂に泊。 3日、二本榎・駒沢・渋谷を回り牛久に帰る。 21日、俳画堂主、牛久に来訪。 下旬、カンヅンスキーの表現派の論文集を贈られ、深く興味を抱く。
		5月		1日、茨城美術展初日の会場にて、「中央の展覧会に遜色はない」と語る。同日、芋銭の出品作「龍巻」は、売約となる。
		6月		先月より、左脊椎から背骨の上まで水痘様のものができ、当月末まで余波が残る。
		7月		依然として不調が続き、更に顫動なども加わり、中旬頃まで擱筆を余儀なくされる。
		8月		3日、俳画堂主、牛久に来訪、1泊し翌日帰京。 4日、宮文助、染太夫ら牛久に来訪。 24日、院展出品画「夜干燈」（夢に見た狐火を描いた）成り、日本美術院宛て鉄道便にて送る。 30日、水戸へ出る。これより、磐城・会津若松を経て、越後に向かう。
		10月	57	3日、佐藤耐雪、牛久に来訪し、2時間ほど歓談。 31日、高岡の俳人筏井竹の門句碑建設のための寄進画「赤壁図」を、同地の関沢卯作宛て送る。
		11月		14日、博物館及び帝国美術院展を観覧、後、齋藤隆三及び野生司氏を訪う。同日、午後9時40分、上野を発ち、15日、午前9時30分、五泉に着く。二宮氏に迎えられ、林檎宅にて昼食。午前11時57分五泉を発ち、新津にて村上線に乗り換え、天王新田で下車。雨中を自動車で揺られ、午後2時前、月岡温泉月岡館に着く。 19日、佐藤耐雪、滞留先の月岡館に来訪し、揮毫済みの作品半折5点を渡す。1泊。 26日頃、佐藤耐雪宛、半折作品6点送る。
		12月		16日、月岡温泉を発ち、自動車にて天王新田に向かう。途次、車は山田に落ち、乗車予定の夜行に間に合わず。翌17日、早朝の列車に乗り、夜、牛久に帰る。
大正15年 昭和元年	1926	1月	57	17日、石倉翠葉献句披講式のため東京に出、午後6時、上野を発ち牛久に帰る。
		2月		16日、俳画堂を訪う。18日まで俳画堂に滞在。 19日、午前9時50分、俳画堂主と共に上野を発ち、取手の宮文助を訪う。夕刻牛久に帰る。
		3月		26日、俳画堂を訪い、同堂に泊。 27日、朝、俳画堂を出て牛久に帰る。
		4月		先月27日牛久に帰った後、体調不良で寝たり起きたりを、今月17日頃まで繰り返す。この間、聖徳太子奉讃展のための作品1点のみを制作。 28日、宮文助母堂死去のため、取手の宮宅を弔問。
		5月		21日、下総地方の親戚の不幸に出向き、1泊。 22日、牛久に帰る。 31日付『東京朝日新聞』に、絵に短文を添えた「よとぼし」を発表。
		6月		1日付『東京朝日新聞』に、絵に短文を添えた「舟風呂」を発表。 9日、俳画堂を訪い、同堂に泊。 10日、聖徳太子奉讃展、表慶館を見学。午後5時、上野を発ち牛久に帰る。下旬頃（あるいは翌月初）、稲田（現笠間市）へ出向き石切山を觀て、富谷観音（現桜川市）に詣で、牛久に帰る。
		7月		『早稲田文学』246号に、表紙絵及び短文に絵を添えた「一茶終焉の家」「妙高夕陽」を発表。 4日、俳画堂を訪い、同堂に泊。 5日、俳画堂にて、石倉翠葉・佐々木林風らと会す。俳画堂に泊。 6日、俳画堂主と共に、取手の宮文助を訪う。宮宅に泊。 7日、宮文助・俳画堂主と共に、益子の日下田宅に向かう。日下田宅にて、濱田庄司と会す。7日～9日まで、日下田宅に滞在。陶画などを試みる。 10日、午前9時30分、益子を発ち牛久に帰る。 14日、俳画堂を訪う。
		8月	58	20日、佐々木林風から依頼の教科用絵画を送る。同日、瘧疾起り、月末まで悩まされる。更にその余波は、8月上旬まで及ぶ。 3日、俳画堂を訪い、同堂に泊。 4日、午前8時45分、東京を発ち京都へ向かう。京都まで俳画堂主同道。京都の旅館「観世楼」に泊。 5日、新井謹也、内島北浪両氏の窯を見学、大市にスッポン料理を食し、午後11時旅館に戻る。 6日、松田省三の案内で、博物館、銀閣寺、黒谷、妙心寺、龜安寺などを見学。午後11時、宿に戻る。 7日、松田らの案内で、醍醐寺、三寶院、隨心院、大石屋敷などを見学。「瓢亭」で昼食。大徳寺見学の後宿に戻る。 8日、正午、京都を発ち大阪へ向かう。大阪茶臼山で昼食。 9日、体調を崩し静養。 10日、丹波に入り、長期滞在。 13日、鳳凰山に登り、頂上から霧海の奇景を望観する。これが、院展出品画の題材となる。 30日朝、完成した作品を美術院まで、列車便にて送る。
		9月		丹波の石像寺の一室を借り、読書や作品制作に専心する。 18日、京都行。高倉通りの俳人・野村泊月宅に泊。恩賜京都博物館を見学。鳩居堂にて筆を求む。 19日、妙心寺、西芳寺、広隆寺。大覚寺を見学。丹波の西山泊雲宅に泊。 20日、終日石像寺にて制作。 21日、石像寺にて名月を愛でる。 22日、圓通山東阜寺に遊ぶ。周辺の景をスケッチ。
		10月		3日、戯画3点（「紆泉洗面の池」ほか）を、齋藤隆三に送る。 4日、午前5時に丹波を発ち、宝塚に福来友吉を訪う。後、大阪を経由し加古川に向かい、尾上と鶴林寺に、それぞれの古鐘を見学。
		12月		12日、東京会への出品画を、丹波から送る。 下旬頃、丹波の石像寺僧舎にて、一絲和尚の『大梅夜話』を好んで読む。 23日、大雪山に登る。
		昭和 2年	1927	1月
2月	59			『俳画講座』第1号に、「俳画を志す人々へ」を発表。 2日、「丁卯清平」描き終わり、依頼者の友野欽一へ送る。 19日、俳画堂主、丹波の寄寓先に来訪、20日まで泊。
3月				7日、友野氏へ送った「丁卯清平」の潤筆料を受け取る。同日夕、奥丹後地震に遭遇。 12日朝、日本美術院試作展への出品画「雪姥と黒狐」を鉄道便にて送る。また、同作品の価格を600円と定める。

				<p>下旬、京都の野村泊月宛「天遊忘江湖」と題するカッパ絵を、丹波から送る。</p> <p>美術雑誌『アトリエ』第4巻第4号に、「紙を問はれたる返事」を発表。</p> <p>3日付『いはらき』新聞に、「芋銭画伯と不老術 今上方で現存仙人と崇仰されている」が掲載。</p> <p>22日、取手の医師高安賢吉に男児出生、命名を依頼され、二様の名を書き送る。</p> <p>下旬、茨城美術展出品画「野人逸楽」、日本一と言われる三丹の牛市を題材とした「貯水池の辺りを行く牛市の群」を描き終わる。京都を發つ。</p> <p>25日、名古屋に入り、従弟の家に2泊。</p> <p>27日、夜行で名古屋を發つ予定のところ、名古屋松坂屋諸氏及び後藤醫師來訪のため、「得月樓」で小宴、夜不快のため、従弟の家に再泊。</p> <p>28日、午前7時31分熱田を發ち、日暮里發午後6時の列車で牛久に帰る。途中、宮文助に出会う。</p> <p>29日、旅の疲れで寝込む。</p> <p>30日、茨城美術展のため水戸へ出る。</p>
		4月		『婦人公論』第12年第5号に、短文「自然のおどし」を発表。
		5月		1日、品川萬松寺山東海寺にて行われる、師本多錦吉郎七回忌法要のため上京、記念撮影の後法要、午後4時散会。
		6月		3日、暮島詩碑（1日序幕、芋銭筆、大洗に建立）を見学、碑前で写真撮影。
		7月		11日、俳画堂主來訪。
		8月		1日、金原省吾、牛久に來訪。
		9月		2日、小林暁月、俳画堂主、牛久に來訪。
		12月		26日、松田省三、俳画堂主、牛久に來訪。
				28日、上京、明治大正展を觀覽、菱田春草の諸作に讚嘆する。後、俳画堂を訪い1泊。
				29日、午前11時、東京を發ち牛久に帰る。
				前月からの病も、月初めは小康を得る。この月、傾きかけた俳画堂救済の展覧会を実現するため、諸方面に出品依頼をするなど腐心する。
				20日、俳画堂主、來訪。
				23日、尿不通となり、28日頃には大便通も困難となり、呻吟の日々が続く。
				30日、漸く床の上に起き上がれるようになる。
				月初め、やっと快方に向かう。
				4日、俳画堂救済の展覧会のため、横山大観に出品依頼をしていたところ、承知の旨を齋藤隆三から知らされ安堵する。先月からの病も快方に向かう。
				27日頃は、散歩を始めるまでに恢復する。
				19日、院展会場へ出向くため上京、午後4時発の列車で牛久に帰る。7月以来、初めての外出で疲労を覚える。
				7日、俳画堂へ年賀葉書300枚依頼。
				2日、友野欽一から依頼の「丁卯清平」の表具成り、箱書きをする。なお、この作品は翌年補筆をする。
昭和 3年	1928	1月	59	1日、牛久にて新年を迎える。
		2月	60	月初めより神経痛に悩まされる。
		3月	60	14～5日は強く顔面に症状が現れ、目を開けられず。
		4月	60	15日、強い症状で1日苦しむ。
		5月	60	16日、漸く症状薄らぐ。
		6月	60	17日、宮文助牛久に來訪、半日ほど快談。
		7月	60	18日、「仏顔石」喧伝に奔走する宮崎仁十郎のため、徳富蘇峰へ紹介状を書く。
		8月	60	下旬、安田毅彦より同氏著『ふるさと』が贈られる。
		9月	60	2日、俳画堂來訪。
		10月	60	5日、大雪の中を上京、齋藤隆三らと会す。午後3時の汽車で牛久に帰る。
		11月	60	25日、友野欽一依頼の「不動尊」・文字・短冊など成り、同氏へ送付。
		12月	60	26日、俳画堂を訪い泊。
				28日、日本美術院同人主催芋銭還暦祝賀のため上京。
				30日、俳画堂と共に、三銀陶器店、三越などを回り、午後牛久に帰る。
				木村武山妻葬儀に參列。
				23日、上京し俳画堂に1泊。
				24日、銚子海鹿島に向かい、午後5時過ぎ着。
				この月、齋藤隆三が一時預かりの、日本美術院同人が認めた還暦祝賀画帖を受け取る。
				23日、友野欽一依頼の「新緑潤国土」成る。
				8日、午前10時から午後1時30分まで、■■美術展を觀る。上野駅午後3時40分発の列車で牛久に帰る、午後5時過ぎ帰着。
				21日、この頃、還暦を記念する画集『芋銭子開七画冊』へ収録する作品について腐心する。
				『美之國』第4巻第8号に、短文に絵を添えた「夏の野趣二題」を発表。
				6日、俳画堂發行の雑誌『東海美術』の表題を描き、俳画堂へ送る。
				25日、院展出品画「荒園清秋」成り、美術院へ送る。
				27日、還暦記念画集『芋銭子開七画冊』収録全作品が決まる。また同画集買取りに関し、上製並製共に50冊と、齋藤隆三宛に伝える。
				6日、『芋銭子開七画冊』が届き、大いに喜ぶ。
				8日、石倉翠葉と共に俳画堂を訪い、1泊。
				9日、牛久に帰る。
				19日、上京し俳画堂を訪う。翠葉・俳画堂主と共に、高輪の牧野子爵家にて雪村屏風を觀、後、泉岳寺參拜。21日まで俳画堂に滞在。
				21日、同堂にて板戸に揮毫、上野發午後1時30分の列車で牛久に帰る。
				『アトリエ』第5巻第10号に、短文「或朝庭を歩みて」を発表。
				1日、俳画堂主・宮文助・石島績と共に、自動車にて、塚の杉山玄之吉を訪う。後、皇道橋、那珂川橋を渡り西村に入り、那珂川の河原から御前山を展望。同河原にて記念写真撮影をし、水戸に向かう。磯崎の酒別神社に參拜、晚餐の後、水戸發7時30分の列車で牛久に帰る。
				■日、友野欽一依頼の「蔵書票」成り、同氏へ送付。
				5日、日本美術院同人ら、牛久に來訪。
				6日、上京し俳画堂を訪う。同日、午後5時発の列車で牛久に帰る。
				下旬、車にて板橋不動院（筑波郡）に參詣。
				7～8日にかけて、上野の博物館などにて中国絵画展を觀、後、牛久に帰る。
				17日、平櫛田中より『戸張孤雁遺作集』を贈られる。
				22日、上京、東京府美術館にて俳画堂と会し、後、俳画堂に戻る。同日、上野駅午後3時30分発の列車で牛久に帰る。
				この月、佐藤耐雪より『良寛遺墨集』を贈られる。
昭和 4年	1929	1月	60	1日、牛久にて新年を迎える。『美之國』第5巻第1号に、「中華名画礼贊」（俳句9句）を発表。
				この歳から、新たな号「菖菴（菴）」を用いる。
				17日、■足寺雨峰僧正來訪、半日ほど閑談。

			18日、孫子■千金方改題、及び春慶塗下絵（敷島大和心5枚、政始食3枚、日新2枚）を書き、俳画堂へ送る。 23日、下総猿島郡の瀧本巳之吉に、火魔降伏のため「龍」字を書き送る。 26日、京都の野村泊月のための絵を送る。
		2月	11日、友野欽一依頼の「良寛月の兎」「甚處来」「跳百歩」成り、送付。
		3月	14日、池田永一治、俳画堂主、牛久に来訪。 24日、20年来の友・取手の宮文助死去、知友と共に取手の「魚藤」に会し痛飲。 28日、告別式に参列。
		4月	14日、俳画堂主ら、牛久に来訪。 18日、上京し俳画堂主夫人告別式に参列。 19日、牛久に帰る。
		5月	茨城美術展のため数日水戸に滞在、この時、茨城美術展会場で芋銭の最大の理解者・池田龍一を知り、以後、親交が始まる。 5日、牛久に帰る。 6日、友野欽一依頼の色紙三枚成り、同氏へ送付。 7日夜、茨城美術展会場が火災で全焼。出品画「老子」など焼失。下旬、「細井廣澤」の書の鑑定依頼が舞い込む。利根川沿岸住の老人から味噌灸の治療を受け、その効を知人にも吹聴。
		6月	15日、『大梅夜話』に触発され、友野欽一に観音経を勧める。 18日、朝上京、俳画堂を訪い、午後牛久に帰る。
		7月	61 月初めより、銚子海鹿島に移る。 3日、俳画堂主、潮光庵に来訪し1泊。 24日、俳画堂主、潮光庵に来訪、同堂主と共に「山本いけす」にて杯を傾ける。俳画堂主、1泊し、翌日帰る。 28日、伊太利展出品画「樹に倚る河童」描き終わり、日本美術院宛て送る。
		8月	当時、良寛の歌及び書簡の2幅と、松山の名月上人の書幅を所蔵。16日付池田龍一宛の書簡で、良寛及び名月上人を、近代の書聖と評する。
		9月	10日、暴風雨、11日、暴風の余波あり、12日、銚子海鹿島潮光庵を引き払い、牛久に帰る。 16日、森田恒友、俳画堂主、牛久に来訪し1泊。 17日、来訪者2人と共に、取手に向かう。車中、篠目八郎兵衛と会し、「魚藤」にて昼食。同日午後4時30分、宮文助の墓に詣でる。後、故人を偲ぶため、利根川に舟を浮かべ観月会を催し、散会。 23日、宮崎仁十郎の「仏顔石」のため、いはらき新聞社長中崎社長へ紹介状を書く。 30日、午後2時頃、俳画堂を訪う。午後5時上野を発ち、牛久へ帰る。
		10月	16日、体調を崩し臥せる。翌月初めまで不快の日々を送る。
		11月	17日、宮文助の追悼会に参席、夜牛久へ帰る、翌18日まで風邪のため臥す。 28日、書「墨情醜於紫氣」「千金慈悲方」蘇東坡の句など数点を認め、池田龍一へ送る。 30日、俳画堂へ賀状200枚を依頼。
昭和 5年	1930	1月	61 自宅にて新年を迎える。歳首、『莊子』を読む。 15日、「東京おもちゃ協会」が成立、その看板を俳画堂から依頼される。 25日、横山大観らのイタリア渡航見送りのため上京、26日、俳画堂に1泊。 27日、東京駅頭で大観等を送る。 28日、上野駅を午後2時に発ち、牛久へ帰る途中脳貧血を起こし、亀有駅で駅員に世話になるも、同日牛久へ帰る。
		2月	月初め、与謝蕪村作「山荘読書図」を手に入れ、大いに喜ぶ。 8日、■南田及び伊藤若冲の花鳥彩色画を、牛久の自宅にて鑑賞する。 13日、この日以降、脳及び心臓に異常を覚え床に臥す。 22日、この頃、漸く回復の兆しを得る。そのため、家人に一人での上京を許されず。また、断酒を固く決意する。 24日、俳画堂主、夫人を伴い牛久に来訪。同日帰京。
		3月	28日、俳画堂主牛久に来訪、1泊。翌日昼食の後帰京。
		4月	下旬、半折3枚と夏目漱石の幅を俳画堂に送る。夏目漱石の作品に興味を覚えないため、俳画堂へ割愛。 30日、澤田竹治郎へ「鍾馗図」を描き贈る。
		5月	『美之國』第6巻第5号に、短文に絵を添えた「裸体と石」を発表。中旬、下村観山葬儀のため上京。葬儀終了後、気分悪しきため友人宅にて休息。午後5時発の列車にて、早々に牛久に帰る。
		6月	月初め、俳画堂より送られた『新花摘』を読む。同じ頃、俳画堂へ「羅生門馬上の綱」など紙本4点を俳画堂へ送る。 5日、会津での旧作「劉元天台採薬」（絹本）の箱書きを依頼されるが、自身の作と認めながらも、表具が悪いため返却。翌月21日、箱書きをする。 30日、早朝、イタリアから帰国する横山大観らを迎えるため上京、日本美術院同人一同と共に、大観を自宅まで送り、日暮里の親戚・会美宅に1泊、翌日牛久に帰る。
		7月	9日、いはらき新聞社創立記念四十哩りレー通信選手乙班四名が牛久を訪い、庭前にて記念写真撮影。 14日、「観音大士」「不動尊」の2作品を、取手の高安賢吉へ贈る。
		8月	62 1日、午後1時、銚子海鹿島の潮光庵に入り、暫く逗留。 5日、海上に龍巻起こる。これは芋銭の画題ともなる。 20日、俳画堂主、潮光庵に来訪し1泊。翌日帰京。
		9月	8日、牛久に帰り、芋銭不在中に、俳画堂主、和田博士と共に潮光庵に来訪。 10日、午後、銚子海鹿島に戻る。同日、来客と共に、浜辺のいけす料理に行き、折から雷雨激しく、傘をさしながら飲食。早々に、寄寓先の潮光庵に駆け込む。 18日から風邪で床に臥す。 19日、午後、『血涙余痕』の序文を送る。 21日、利根川架橋竣工式典に記念品として、風呂敷が配布される。この図案を描く。 26日、上京し俳画堂を訪い1泊、27日、牛久へ帰る。数日後、銚子海鹿島に戻る。
		10月	6日、森田恒友ら諸氏と共に宮文助の墓に詣で、後、利根川の中流に名月を愛でる。 14日、半折10枚及び越中坂井氏分の作品を、俳画堂に送る。 20日、銚子海鹿島の潮光庵を引き上げ、牛久に帰る。 29日、取手の長禅寺「清涼亭」扁額彫刻を山田正平に依頼し、快諾を得る。
		11月	12日、東京会の出品画を送る。 13日、自宅草汁庵改修のところ、屋根の葺き替えが完了。 20日、俳画堂へ賀状300枚を依頼。
		12月	上旬、西山泊雲より、与謝蕪村「奥の細道図屏風」の複製画を送られる。 7日、俳画堂主、松田省三ら3氏、牛久へ来訪。同日帰京。 25日、松田氏依頼の「南山荘」文字を、俳画堂宛送る。 26日、横山家葬儀のため上京、夜、牛久に帰る。また、横瀬夜雨の随筆『太陽に近く』の装幀を引き受ける。



昭和 6年	1931	1月	62	『美之國』第7巻第1号に、短文「元日の朝」を発表。 11日、上京、日本美術院の相談会に列席、日暮里の親戚会美方に泊。 12日、日本美術院の相談会に列席、深夜12時近く会美方に戻り泊。翌日、牛久に帰る。 15日、表具師「錦光堂」にて、院展出品作「止水」「太古香」の裂地の相談をする。 27日、横瀬夜雨の随筆『太陽に近く』の表紙絵を、宮崎仁十郎宛て送る。
		2月		2日、山田正平、かねて承諾の「清涼亭」刻字が完成、携え来訪。
		3月		4日、俳画堂主、牛久に来訪し、即日帰京。
		4月		21日、この頃、齋藤隆三、寺内新太郎、蛭原凡平、渡部鼓堂、鮫川マッサージ、加藤写真士の一行、牛久に来訪。 22日、同日付『いはらき』新聞に、この訪問記が掲載。
		5月		7日、第5回茨城美術展のため水戸に出る。水戸に午前11時23分に着き、横山大観等と審査に当たり、水戸に泊。 8日付『いはらき』新聞に、審査風景写真が掲載。同地に再泊。 9日、午後1時からの同展作家招待園遊会に出席。同日、牛久に戻る。 26日、品川東海寺における師本多錦吉郎の十年忌法要のため上京。法要終了後、直ちに牛久に帰る。
		6月		6日、「長沙散歩」描き終わり、表具師鈴木厚司宛て送る。
		7月		2日、この日以降不快となり、5日床に臥す。 13日、稍回復。 下旬、持病により臥す。
		8月		先月末より床に臥し、8日頃起き出でる。 9日、表具師錦光堂「太古香」を携え、牛久に来訪。その表具の出来に満足する。 10日、「太古香」を池田龍一へ小包便にて送る。この日の朝、「天魚楼」にて、沼から流れてくる刈藻の歌を聞く。 18日、表具師錦光堂より、蘇東坡の詩を題材とした「望湖楼」の軸が送られ、箱書きを池田龍一へ送る。
		9月	63	2日、院展出品につき、齋藤隆三から電報を受け取る。 3日、出品不可の旨の書簡を、齋藤宛て認める。 13日、中島菜刀の日本美術院展入選及び院友推挙を喜び、中島宛に手紙を書く。 19日、千葉県を経て上京、東京に1泊。 20日、院展一覽、後、博物館にて池大雅らの作品を観るも、体調不良により、上野駅12時50分発の列車で牛久に帰る。
		10月		10日、午後5時、建碑発起人の一人として、本多錦吉郎建碑委員会のため、神明町の丸山晚霞宅に諸氏と共に会し、俳画堂に泊。 16日、西山泊雲所蔵となる「潮来十二橋」「月光森林」の2作の潤筆料について、前者を150円後者を100円と、西山へ伝える。 25日、午前8時50分、二男洗二と共に福島へ向け発。午後6時40分、福島に入り池田龍一宅に泊。 26日、夕刻、飯坂西堀切村の寓居に入る。 29日、池田氏と阿武隈川に鮭の網代を見る。 31日、夜、片山素堂来訪。
		11月		1日、素堂と共に福島駅に至る。1時過ぎ、白川南湖に遊ぶ。南湖駅から棚倉へ向かい、素堂宅に泊。 2日、素堂の妻の案内で、観音寺城趾を見学。 3日、素堂と共に須賀川の長松院へ入り、清流和尚の歓待を受ける。夜、棚倉の素堂宅へ戻り泊。 5日、飯坂に戻る。 10日、終日作画に専念。 12日、前日完成した高浜の篠目八郎兵衛のための絵を送る。 14日、短冊30枚成る。 29日、師本多錦吉郎建碑寄付画10点成る。
		12月		2日、水戸の渡邊、東京蒲田の村居、両氏へ絵を送る。 18日、カッパ絵3点を俳画堂へ福島より送る。 27日、石川氏へ色紙12枚渡す。山口静慶氏への絵を福島市より送る。
昭和 7年	1932	1月	63	1日、福島で越年。福島からの帰途、3日、水戸に入り、1泊。 4日、夕刻、水戸を発ち牛久に帰る。 25日、師本多錦吉郎建碑相談会のため上京、その後、俳画堂を訪い1泊。 26日、午後7時上野駅を発ち、牛久に帰る。
		2月		『美之國』第8巻第2号に、短文に絵を添えた「早春三題」を発表。 2日、銚子海鹿島に戻る。 11日、西山泊雲から送られた院展出品画「丹陰霧海」を再見し、作画の意を尽くせざる点に嘆息す。 28日、郷里からの出兵を送るなどのため、牛久に帰る。
		3月		4日、牛久より海鹿島に戻る。腸の具合悪いところに風邪を引き、更に顔面痛も加わり床に臥し、12日頃まで何もせず日を過ごす。 24日、書簡にて、弟・安三に「観音十句経」を勧める。
		4月		17日、中村岳陵へ挿絵画家を志す郷里の青年の紹介状を書く。
		5月		19日、妻が脳溢血にかかり、急遽牛久へ帰る。幸い事なきを得るも、暫く牛久に留まる。 23日、俳画堂主、牛久に芋銭夫人を見舞う。
		7月		5日、牛久から銚子海鹿島に戻る。
		8月	64	『アトリエ』第9巻第8号に、短文「水郷画趣」を発表。 月初め、身辺世話のため、三男知可良を銚子へ呼び寄せる。 28日、院展出品画「海島秋来」成る。池田龍一所望のため、非売とする。
		9月		『美術新論』第7巻第9号に、短文「作家言」を発表。 20日、一時牛久に戻る。
		10月		1日、上京、院展及び博物館を巡り、後、横山大観を訪うも不在。1時30分発の列車にて牛久へ帰る。 3日、銚子へ戻る。下旬より脳充血気味にて床に臥す。
		11月		10月下旬よりの不調、ようやく9日頃回復。この間、絵筆を執れず。 23日、俳画堂へ賀状500枚依頼。
		12月		病むことが多いため、この頃、5時に起き「天魚楼」にて「観音経」200遍誦する日が続く。 22日、千葉病院に森田恒友を見舞う。 31日、牛久の自宅にて、ラジオから流れる除夜の鐘を聞く。
		昭和 8年	1932	1月
2月				この頃、『草汁漫画』（明治41年刊）再版話を持ち上がる。再版は望まないが、再版の時は、削除したい作品があること、及び序文跋文も小杉放庵と自身のものだけにしたいと、西山泊雲宛の書簡に記す。
4月	65			8日、12時前後より日没まで、体調を崩し不快に過ごす。ラジオにて、花祭りの少女歌劇を聴く。 11～13日、師本多錦吉郎顕彰碑建立の資金を得るため、日本橋区通り三丁目の青樹社にて展覧会が開かれ、芋銭もこれに出品する。 23日、山村暮鳥顕彰の「暮鳥会」が発足、水戸駅前の「小松屋」における発会式に出席。数日滞留の後、自動車にて牛久に帰る。

		5月	『アトリエ』第10巻第5号に、「憂鬱なる江村と森田氏」を寄稿。 25日、午前5時50分牛久を発ち上京。午前7時、上野駅頭にて俳画堂主に迎えられ、共に自動車で、上品川の東海寺にゆき、ここで俳画堂主と別れ、泉岳寺に於ける彰枝堂の師本多錦吉郎の法要に参席し、3日ほど滞留。 26日、高輪泉岳寺境内に師本多錦吉郎翁碑が建てられ、その序幕式に参列。午前11時前、除幕式が挙行される。式典終了後、同寺書院にて、「懐旧談片」として芋銭が小話。
		8月	7日、甲府に住む長男修一から、男児誕生の電報を受ける。「未太郎」と命名し書き送る。 27日、表具師「芋弘堂」、牛久へ来訪。
		9月	先月末より10日頃まで、病懶気味に過ごす。 12日、千葉県銚子海鹿島潮光庵に入る。以後、同地に2年間ほど滞留。 25日、銚子海上に龍巻を見る。月末、縁家の不幸その他で、一時牛久に帰る。
		10月	6日、表具師錦光堂主、「海島秋来」「水郷」の表具成り持参。特に、「海島秋来」の表具を喜ぶ。 この月、西山泊雲らと水郷に遊び、1泊の後海鹿島に戻る。
		11月	8日、この日頃、画商尚美堂主、海鹿島へ来訪。 17日、一時、牛久に帰る。 19日、上京し1泊。20日、潮光庵に戻る。 20日、俳画堂に賀状500枚依頼。
		12月	11日、画材を得るため潮来に遊び、1泊。 12日、銚子海鹿島に戻る。
昭和 9年	1934	1月	65 銚子海鹿島潮光庵にて、前年からの風邪が直らず体調不良のまま新年を迎える。
		2月	24日、俳画堂主、幡ヶ谷の芋銭二男宅に寄寓中の芋銭を訪う。 25日、午前10時頃、夫人を伴って俳画堂を訪い、同堂と共に1泊。この日、芋銭夫人は帝劇で観劇。 26日、午前7時45分上野発の列車で、夫人と共に牛久へ帰る。更に荒川沖まで足を伸ばし、鶴町宅を訪うも不在。 27日、鶴町氏、牛久へ来訪。28日、潮光庵へ戻る。
		3月	23日、俳画堂主、潮光庵へ来訪、即日帰京。
		4月	19日、俳画堂主、潮光庵へ来訪し1泊。翌日、早朝帰京。 28日、作品32点を、銚子より俳画堂に送る。 30日、扇面横物併せて23点を、銚子より俳画堂へ送る。以上の55点は、翌月開催の個展の為の作品。
		5月	7～13日、東京三越にて「芋銭子俳画展覧会」を開催、総数55点出品。 7日、芋銭夫人及び親族併せて3名、展覧会場へ出向く。芋銭は視神経衰弱のため不参。会期中も不参。 18日、上京、国宝展鑑賞の後、俳画堂に1泊。 19日、牛久へ帰る。 23日、潮光庵に戻る。
		6月	15日、一時牛久に帰る。 19日、銚子海鹿島に戻る。
		7月	20日、俳画堂主、潮光庵に來訪し1泊。翌日帰京。
		8月	66 『改造』第16巻第9号に、短文に絵を添えた「夏雲五題」を発表。 16日、俳画堂主、潮光庵へ来訪し1泊。翌日帰京。 22日、「秋林反照（反照）」を描き始める。潮光庵所有の篠目八郎兵衛から依頼の6曲屏風「江村六月」を7月から描き始めるが、実景を観る必要から休筆。
		9月	18日、一時牛久へ帰る。 21日、暴風の中上京、院展開催中の美術館へ向かう。午前11時頃、暴風のため会場閉鎖も危ぶまれたが、正午には風も収まり、展覧会は続行。後、二男洗二宅に向かい、1泊。 22日、牛久へ帰る。 23日、銚子海鹿島へ戻る。 30日、一時牛久に帰る。
		10月	1日、上京、日本美術院展及び博物館を巡る。3日頃、銚子海鹿島に戻る。 7日、暴風雨のため、画室潮光庵に雨漏り。 24日、一時牛久に帰る。
		11月	『中央公論』第49巻第12号に、短文に絵を添えた「水郷の秋」（出水、龍巻、貝の化石の丘、船上水風呂乃月、水郷十二橋、藻荇歌、閑々人、蓴菜花）を発表。
		12月	5日、名古屋で開催の個展に出品する作品を描き終わる。 14日、午前、上京し俳画堂を訪い1泊。 15日、午前9時東京駅を発ち、午後2時17分名古屋に着く。旅館「丸文」に入る。 16～17日、名古屋市鶴舞公園鶴々亭にて、「芋銭子小品画展」を開催。 16日、午後3時、中島菜刀、小林巢居と共に個展会場を訪れる。午後5時30分「鯛めし」にて「清談会」に参席。 17日、瀬戸の大川氏を訪い、中島、小林らと瀬戸焼を見学。 18日、高島郡青柳村小川の藤樹神社に参詣の後、祖先の地を巡る。しかし、小川家縁の家は皆無と知る。 21日、銚子へ戻る。旅の疲れで床に臥す。そのまま、越年。
昭和10年	1935	1月	66 1日、銚子海鹿島潮光庵にて新年を迎える。 3日、書籍『近江源氏先陣館』を入手したいと、書翰にて俳画堂主へ依頼。 15日、三男就職のため、澤田竹治郎へ力添えを依頼。 16日、未だ前年の旅の疲れからくる、鬱血や手の顫動のため制作できず。
		2月	24日頃、会津の椀餅を毎日1個食す。
		3月	67 初旬、展覧会へ出品する池田龍一所蔵の「太古香」が、美術館の不手際で一時所在不明となり、大いに驚ろかされる。 17日頃、一時牛久へ帰る。 19日、銚子に戻る。 25日、取手の宮崎仁十郎を訪うも不在。夫人に会った後、「魚藤」へ寄り牛久へ帰る。 27日、早朝、取手の宮文助の墓に詣でる。後、銚子へ戻る。 29日、『太田盛衰記』の口絵を描くため、太田（常陸太田市）より真弓山を望む写真を1枚、宮崎仁十郎に依頼。
		5月	9日、刀川碑文字成り、宮崎仁十郎宛送る。 27日、夕刻、牛久に帰る。 30日、朝、茨城美術展のため水戸へ出る。水戸着午前11時44分、安藤知事らの出迎えを受け、駅頭にて記念写真撮影後、県庁に入る。以後、数日滞留。
		6月	■日、新帝国美術院展の参与に推される。
		7月	13日、酒井三良を通して、篆刻家長曾我部木人に、「大虚筆」印を2顆制作依頼。

昭和11年	1936	8月	<p>かねて約束していた篠目八郎兵衛の為の六曲一双屏風「江村六月 雲巒烟水」が完成、20日、同氏へ引き渡す。同氏大いに喜び、潮光庵隣の「仙松閣」にて鑑賞の小宴を催す。屏風は直ちに高浜の篠目宅へ送られる。</p> <p>21日、長男の妻春子及び孫永太郎と共に、銚子観音に詣でる。</p> <p>26日、俳画堂主、画商長寿堂と同道、潮光庵へ来訪。「山本いけす」にて共に昼食をとる。俳画堂主は1泊し、翌日帰京。</p>
		9月	<p>前月下旬から腸を病み、4日まで下痢が続き、5日にようやく収まる。</p> <p>5日、横地信輔著『酒屋の子』の装幀画等成り、同氏宛て送る。</p> <p>15日、永く逗留していた銚子海鹿島を引き払い、牛久に戻る。</p> <p>20日頃、上京。</p> <p>21日、二男宅にて平臥。</p> <p>22日、牛久に帰る。</p> <p>24日、関東一円に未曾有の洪水、被害は日に日に増大。</p>
		10月	<p>美術雑誌『塔影』10月号に、「利根川出水所見（俳句二句）」を発表。</p> <p>23日、牛久より、文村横須賀（現利根町）に移る。以後の約2年間、同地に滞留。</p> <p>25日、訪客を謝するため、居所を明らかにせず。</p>
		11月	<p>1日、文村横須賀にて絵を描き始める。居所が知られ、訪客に悩まされる。</p> <p>17日、序幕なった「横瀬夜雨詩碑」（芋銭書）見学のため、18日、雪後の筑波へ登る。</p> <p>22日、石井氏文村横須賀に来訪。</p> <p>27日、俳画堂主、文村横須賀へ来訪し1泊、翌日帰京。</p>
		12月	<p>この頃、既に芋銭の贋作が横行。</p> <p>22日、石島嶺から作品の写真を送られ、贋作と告げる。</p>
		1月	67 <p>文村横須賀にて越年。『塔影』1月号に、「身辺問談」を寄稿。</p> <p>24日、『河童百図』の「見返し」「序文」成る。</p> <p>30日、横須賀からの遠望を題材とする「曉烟」（第1回改組帝展出品作）の制作に着手。</p>
		2月	<p>6日、表具師寺内新太郎へ、改組第1回帝国美術院展出品画「曉烟」の表具を依頼。</p> <p>9日、二女桑子、帝展出品画を携え上京。上旬、渡辺鼓堂、上野駅にて芋銭作品を紛失。</p> <p>10日頃より、鼓腹下痢の為、安眠できない日が続く、25日夜頃から、眠りも平常となる。</p> <p>29日、尾張の佐々黙々著『歌集 尾張野』の表紙絵など成り、佐々宛て送る。</p>
		3月	<p>4日、牛久へ帰り、また、文村へ戻る。</p> <p>16日、俳画堂主、文村横須賀に来訪し1泊。</p> <p>17日、俳画堂主と共に上京、同堂に1泊。</p> <p>18日、芋銭の二男と共に、上野の展覧会場及び博物館を巡る。</p> <p>下痢腹痛により帰郷を1日延ばし、21日、文村横須賀へ戻る。</p> <p>23日、弓削家墓参の後、立木地蔵院に参詣。</p> <p>28日、一時牛久へ帰る。親戚の会美老人、牛久の得月院に1泊中急逝。葬儀を済ませた後、横須賀へ戻る。</p>
		4月	<p>この頃、芋銭の偽カッパ絵が更に横行。</p> <p>18日、三男知可良結婚のため上京。俳画堂主と共に博物館を見学し、幡ヶ谷の二男宅に泊。</p> <p>19日、幡ヶ谷の寓居先へ、俳画堂主来訪。</p> <p>20日、三男知可良が結婚、東京の「三楽荘」にて挙式。後、神戸にて婚筵挙行のため神戸に向かう。</p>
		5月	68 <p>1日、神戸に入る。</p> <p>2日、三男・知可良の婚筵挙行。</p> <p>3日、丹波に入る。</p> <p>5日、城之崎に入る。</p> <p>10日、城之崎の温泉寺を訪い、和尚の案内で寺宝を多数見学。</p> <p>12日、午後2時30分、俳画堂主、芋銭滞留中の城之崎温泉「三木屋」へ来訪。</p> <p>16日、西山泊雲「三木屋」へ来訪。</p> <p>18日、諸氏と共に、応挙寺、香住等を巡り観る。</p> <p>26日、塩見青嵐、来訪。</p> <p>27日、午前9時55分、城之崎「三木屋」を発ち、俳画堂主、塩見青嵐らと松江に向かう。車中、西山泊雲と合流、総勢4名の旅行となる。同日、午後3時、松江に着く。一旦「臨水旅館」に落ち着き、有澤山荘、楽山窯、不昧公の茶室「菅田庵」等を見学。</p> <p>28日、鰐淵村の鰐淵寺・不老瀧などを見学のため、平田から車を走らす。平田に戻り大社へ向かい参拝、「竹野屋」に泊。夜、泊雲帰る。</p> <p>29日、須佐に向かう。須佐神社や山村の民家などをスケッチ。今市の「紙屋旅館」に泊。</p> <p>30日、八川に向かう。横田に戻り、付近の炭小屋などをスケッチ。帰途、穴道より玉造温泉に至り「保性館」に泊。</p> <p>31日、玉造湯神社に詣でる。松江城、小泉八雲の旧居や記念館を見学。後、胡床山に登る。夕刻、「臨水旅館」に戻る。</p>
		6月	<p>1日、午後0時27分に松江を発ち、午後10時10分京都に着き、「観世楼」に泊。</p> <p>2日、「観世楼」にて昼食の後、真葛原の「中村屋」に転宿。博物館を觀て帰宿。</p> <p>3日、午前7時頃、宿を出て、俳画堂主と共に五条坂大丸北峰窯を見学、午後4時帰宿。</p> <p>4日、朝、俳画堂主と共に、八坂神社、円山公園、清水寺などを参詣し帰宿。西山俊三、西山泊雲ら、滞留中の宿を来訪。</p> <p>7日、五条坂の窯で清水六兵衛の煎茶器に陶画を試みる。</p> <p>8日、午前、一乗寺を見学、午後、丹波に向かう。</p> <p>23日、丹波より帰郷、夜9時頃東京着、幡ヶ谷の二男宅に泊、同宅に数日間滞在。</p> <p>24日、午後、俳画堂主、滞留中の二男宅へ来訪。</p> <p>25日、俳画堂主、再び来訪、陶器箱書きを依頼す。横地信輔、鈴木原由来訪。</p> <p>26日、上野発午前10時30分頃の列車で、俳画堂主と共に牛久へ向かう。途中、取手に下車し「魚藤（刀水亭）」にて昼食、後、牛久へ帰る。</p>
		7月	<p>『中央公論』第51巻第7号に、短文に絵を添えた「雨の水輪」「池中の樹」を発表。</p> <p>20日、牛久から文村横須賀へ戻る。</p>
8月	<p>11日、大宮伍三郎名古屋新聞専務理事就任を祝し、「良寛鉢の子」を描き贈る。</p>		
9月	<p>7日、俳画堂主、文村横須賀に来訪し1泊。</p> <p>8日、弓削氏、俳画堂主と共に牛久へ向かう。</p>		
10月	<p>6日、上京、午前8時40分上野に着く。同駅にて俳画堂主と会す。</p> <p>15日、『河童百図』の扉絵成り、俳画堂へ送る。</p>		
11月	<p>1日、近衛家別邸の杉戸絵4枚成る。即日、水谷川及び近衛家別邸に電報を送る。</p> <p>2日、搬送トラックが杉戸絵を積み出すのを見届け、急用のため牛久へ帰る。</p> <p>8日、かねて普請に携わる大工等が不始末を起したため、大工職人一切を解雇し、新たに、親の代より出入りの東京の大工に普請を任す。</p> <p>27日、俳画堂主、文村横須賀に来訪。</p>		
12月	<p>2日、俳画堂に賀状500枚依頼。</p> <p>29日、俳画堂主、文村横須賀に来訪。</p>		

				30日、再来訪を受け箱書きをする。
昭和12年	1937	1月	68	1日、文村横須賀にて越年。『中央公論』第52巻第1号に、短文「椿の餅花、月夜の豆苗、蚯蚓の得意、奇妙な病氣、狐と凍豆腐、枯れ草と落葉の音楽、枇杷の花」を発表。 年頭、山崎斌より羽織下が贈られる。 9日、大腸などを患い床に伏せる。 21日、見舞いのため、文村横須賀に俳画堂主夫人来訪。 17日、滞留先の文村横須賀に、酒井三良来訪。 24日、見舞いのため文村横須賀に、俳画堂主来訪。 27日、滞留先の文村横須賀に、酒井三良来訪。
				2月
		3月	5日、「河童百図」の潤筆内金1千円が、俳画堂より送られる。 19日、文村横須賀に、俳画堂主来訪。 30日、滞留先の文村横須賀に、酒井三良来訪。	
		4月	7日、「河童百図」のうち10点、俳画堂へ送る。100図の内51図が完成。 15日、「古稀記念新作画展」を6月中旬へ延期。 19日、「河童百図」の完成数が49図と、俳画堂より知らされる。 24日、滞留先の文村横須賀に、酒井三良来訪。	
		5月	4日、この頃、精力的に「古稀記念新作画展」のための作品を制作。 10日、体調を崩し床に臥す。 11日、文村横須賀に、俳画堂主、西田正秋来訪。中旬、墨人会への出品を、病のため断る。 26日、ようやく起き出すが、筆が思うように動かず絵画制作までは復調せず。「古稀記念新作画展」を秋まで延期。	
		6月	月初め上京、川村柳月に連れられ、富田溪仙遺作展を観る。 2日、文村横須賀に戻る。二女病氣のため半久へ帰り、旬日留まる。	
		7月	17日、俳画堂主、文村横須賀に来訪し、即日帰京。この日、西山泊雲も来訪。 18日、筑波・椎尾あたりへ出かけ1泊。 19日、筑波から半久へ帰る。数日後、文村横須賀へ戻る。 29日、俳画堂主、文村横須賀に来訪し、即日帰京。 30日、三男の嫁に、書翰中にて十句観音経を勧める。	
		8月	3日、西山泊雲宛の書翰で、拡大の途をたどる戦争を懸念、早期収了を願う。 26日、12時過、高島屋の中西氏、「河童百図」の件で半久へ来訪。この時点で、100図総てを描了、俳画堂に渡し済み。 28日、文村横須賀に、俳画堂主来訪、昼食を共にす。即日帰京。	
		9月	再興第24回日本美術院展に「湖上迷樹」を出品。これが同展最後の出品となる。 19日、朝来の雨の中、多量に荷物を積み込んだ車と共に、文村横須賀から半久へ帰る。新築なった画室兼居宅「雲魚亭」へ入る。	
		10月	1日、上京し、古稀展相談のため齋藤隆三を訪うも、折から齋藤は病にあり面会謝絶とのことで、そのまま半久へ帰る。 5日、飯野一瓶、川村柳月来訪。同日、2氏と共に、雨中半久沼に舟遊びをする。泊崎大師を詣で、佐貫を目指す。雨は舟上の三人をたたく。酒亭「湖月」に至り杯を傾ける。 18日、植松圭大依頼の「梅花書屋」成り、植松宛送る。	
		11月	24日、明日からの個展のため上京。25～27日、日本橋東美倶楽部にて「小川芋銭翁古稀記念新作画展」を開催。主催は、東京銀座名古屋新聞支局。総数61点を出品。 25日、午後、俳画堂主と東京美術倶楽部の展覧会場で会談。 27日、半久へ戻る。 ■日、小川芋銭翁古稀記念新作画展出品画を中心とした『芋銭子開八画冊』を刊行。	
		12月	7日、午後4時過、俳画堂主、半久に来訪し1泊。翌朝帰京。 15日、早朝、長男修一、臨時召集のため出征。 16日、古稀寿賀の筈が取手にて催され、こう夫人と共に招かれる。 24日、荒川沖の鶴町運衛宅にて行われた、千手観音開眼式に参列。	
昭和13年	1938	1月	69	『塔影』第14巻第1号に、「河童の話その他」を寄稿。 21日頃、下痢が続き悩まされる。 30日、半久に、俳画堂主夫人来訪。この日、「仙桃」描き終わる。 31日、夕刻入浴中に脳溢血で倒れ、右手に不自由を来す。
				2月
		7月	70	『ちまき』第11巻第2号に、芋銭の談話の要旨を川村柳月が纏めた「ボボ鳥の鳴く頃」が掲載される。 17日、俳画堂主、芋銭を見舞う。 31日、酒井三良、半久に芋銭を見舞う。
		9月		『ちまき』第11巻第4号に、「御老体の上の御病中併しこの頃御氣分よし」と病状が知らされる。
		10月		『ちまき』第11巻第5号に、「御氣分よくなられた。併し御身体は御自由にならず。」と病状が知らされる。 9日、俳画堂主、芋銭を見舞う。
		11月		5日、齋藤隆三宛て書翰を認める。これが最後の書となる。
12月	2日、酒井三良、半久に芋銭を見舞う。 17日、午後11時危篤。同日逝去、生涯を閉じる。 18日、酒井三良、芋銭死去後の半久を訪う。 22日、半久の得月院に葬送される。			